



「至徳堂」の中で

その後、帰路につきました。

子どもたちの様子はというと、一日目で掃除の仕方がわからない、施設での食事はバイキングなので、自分の食べられる量がわからず、たくさん盛りつける、ティッシュを必要以上にたくさん取り出すなど、いろいろな課題が見えたが、三日目にもなると、それぞれが個々の活動の中でがんばっていることが、目に見えてわかってきました。特に各係の報告や発表の時、多くの人の前で話すことが出来たし、集団生活の中でのルールも理解できるようになってきたと思われました。

中学・高校生リーダーも良いお兄さん、お姉さんで、余裕を持って小学生に接する姿が見えたことは、ほ

ほえましく、たいへん喜ばしいことでした。

十月十九日には、藤樹先生の門徒の一人で中西又左衛門、即ち馬方又左衛門さんの行いを記した由来碑がある安井川交差点角へ行きました。彫られた内容を皆で読み、その後バスにて大津市和邇の榎宿跡へ向かいました。又左衛門さんの足跡をたどるつもりで歩いて新旭まで帰る予定でしたが、雨がきつかったこともあり、子どもたちの安全かつ健康を考え、やむなくバスで帰ってきました。帰着後、新旭公民館で藤樹紙芝居「馬方又左衛門」をリーダー（中学生）に読んでもらい、改めて馬方又左衛門さんの正直な心、他人を思いやる心を勉強しました。

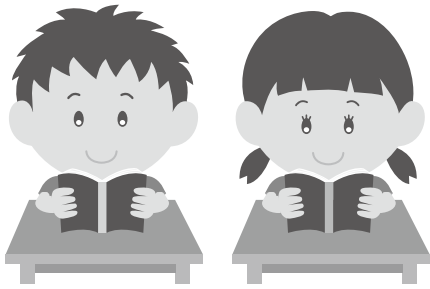


馬方又左衛門の石碑の前で



大津市和邇榎宿跡の碑の前で

与右衛門道場に参加された子どもたちも、これから地域のリーダーとして参加・活躍してくれることを願いたいと思います。



「藤樹紙芝居」の紹介 ⑮

『孟子とお母さん』

（解説）

藤樹先生は、伊予の国大洲から、小川村に戻って後は、先生を慕って集まってくる武士たちの教育に力を注ぐ一方、小川村はもとより、近隣の村々にも出向いて、村人にもよく分かる講話をされたことが伝えられています。

本紙芝居は、先生が女性教育のために書いたと伝えられる『鑑草』の中の話です。夫を戦で亡くした孟子の母は、孟子の教育に心を砕きました。一人息子の孟子を決して甘やかさず、厳しくも深い愛情をもって育てました。孟子は、この母の姿勢から、人間としての生き方を学びます。『この親ありて、この子あり』という言葉がありますが、孟母の真剣な教育姿勢を、今の子育てにも生かすことができるのではないかと思われる内容です。

▼参考文献

『鑑草』（関西大学 著・発行）

『中国服装史』（華 梅 著）

『孟子』（明治書院 発行）

『孟子』（中国の思想三 徳間書店 発行）